

イエスタデイ

清水邦夫 作

1997年上演台本版

登場人物

稲葉次郎

塩子

浦田源一

” 海

” 雪

” 夢

矢坂（出征兵士）

闇。

若者、登場。

稲葉次郎。

一枚のCDを手に行している。

次郎

ここに一枚のCDがあります。ポーランドの歌手、エバ・デマルチクの歌……。ポーランドは第二次世界大戦で大変な悲劇を被った国ですが、それ以後もいろいろな苦しみを味わいました。彼女はその悲しみと怒りを歌っています。これから皆さんにお伝えする私の思いは、直接この歌には関係ありません。ただ、この歌を聞くと、なぜかあの日のことが、あの日たちのことが浮かんできます。

次郎

ここは写真館です。稲葉写真館。場所は海鳴りが聞える日本海ぞいのある町……。そうです、ぼくの生れた家……。でも、いまは休業しています。休業といいますが、実はすでに廃業が決り、来月にも更地にしておきます。そのあとにマンションが建つ予定です……。（足をとめ、客席をふり返る）ところで、ぼくは幾つに見えますか、二十才？ 十代の終り？ それよりもっと若く、少年？ いいえ、実際のぼくはもっと年齢をとっています。皆さんが信じられない位……。でも、不思議なことに、この写真館のスタジオに入ると、いつも若返ってしまふんです。急速に川をさかのぼるように、あるいは魔法をかけられたように……。やがてきまって昔憎しみ合った、そして愛し合った仲間たちが現われます……。

微かな音楽……

闇に一枚の大きな写真のように、カメラを見つめて並ぶ一群が現われる。

次郎 この写真は、ぼくが撮りました。だからぼくは入っていません……この中央にいる軍服の人は姉さんの知り合い、そのとなりがぼくの姉さん……そして、二人をかこむようにしている連中が、当時わが家に疎開していた浦田家の面々です。疎開といえは、もう時代がおわかりでしょう。そう、太平洋戦争が激しくなった昭和二十年の一月、東京からわが家へやってきました。おふくろのいとこの子どもたち、実はそれまで一度も会ったことがなかったんです。(ふり返ってこうやってごらんになると、みんなおとなしそうな顔をしています)が、ところがどうして、大変な連中……ぼくなんかはじめ宇宙人かと思っただけです。しかし、いまから考えると、とにかく忘れ難い連中です……ぼくの悪夢、ぼくに吹き込んできたふしぎな風……そして、ぼくの青春……

音楽、高なり……
それらが風音の中に消えていく。

2

写真館の写場、見えてくる。

無人……

ラジオが鳴っている……ニュース……

ニュースの声 「臨時ニュース、臨時ニュースをお伝えいたします。本日午後二時三〇分頃、敵機B₂が約二機、東京上空に來襲、丸の内、銀座、月島方面を爆撃、多大の損害をあたえました。現在判明したところでは、死傷者推定二万数千、行方不明多数……なお、被災した家屋は一万八千戸におよぶものと思われまます。その後、敵機は日本海方面へ抜けた模様で……」

次郎、現われる。
若々しい衣裳……

次郎 さて、あの日のことを話さなくてはいけません、彼等がやってきたあの日……東京は連日にわたる空襲で、ラジオをきいているとほとんど潰滅してしまったのではないかと思ったあの日の午後……

リュックサックや大型のバッグをもった浦田家の面々が無言で入ってくる。

長女の海、長男の源一、次女の雪、三女の夢……

と、いきなり雪と夢、殺虫剤をとり出し、噴霧しはじめる。

次郎、啞然……ややあつて。

次郎 おい、やめろよ。

二人、構わず噴霧しつづける。

次郎（源一に）ねえ、とめて。

源一 どうして。

次郎 なんなんだよ、これ。

海 殺虫剤じゃない。

次郎 それは知ってるよ、でもなんで殺虫剤なんか……（と、二人に吹きつけられて咳こむ）おい。

源一 虫がいるんだよ。

次郎 虫なんかいないよ。

海 いるよ。

次郎 いないよ。

源一 いる、ぜったいいる。

次郎 なんで、そんなこと、いえる。

海 この子たち、虫に関してはずごく敏感なのよ、天才的に敏感なんだから。

源一 こいつらがいると思ったら、必ずいるんだ、躰で感じるんだ。

次郎 畜生！ 田舎をバカにするな。

源一 バカになんかしてないよ、(二人に)どう？

雪と夢、顔を見合せる。

雪 ゴキブリはいないわねえ。

夢 いるとすれば、ダニ。

雪 そう、それもどこかにかたまっている。

二人、写真機に近づく。

次郎、あわてて立ちふさがる。

次郎 いるわけないだろ、カメラに。いい加減にしろよ！

二人、カメラのそばを通り抜けて、ライトに照らされている長椅子に近づく。

源一 (見やって) ダニってあったかくて、しめった所にいるんだよな。

海ものぞく。
と、突然、夢、軀をくねらせる。

夢 ああ……。

雪 あたしも……。

海 いやだ、あたしもなんだか。

源一 けっ！ おれも……（次郎に）きみもかゆいだろう。

次郎 かゆくない！

源一 落つけよ、きみだってかゆいはずだよ。

次郎 かゆくない！ くそ、なんだ、お前たち、いきなり無断で入ってきて、ゴキブリだのダニだの……いいか、ここはあれなんだ、親父がニューギニアに出征して以来、おれがいつも掃除してるんだ。おふくろが病院に入ってから、この主はおれだ。だから、いつもホコリがたまらないように、カメラもなにもいつもピカピカに磨いて……それを……くそっ！ 出てけ！

源一たち、顔を見合わせる。

次郎 なんだい、縁もゆかりもないやつがドサドサ入ってきて……早く、出てけ！

源一 あのさ。

次郎 ン？

源一 縁もゆかりもあるんだよ。

次郎 縁もゆかりもある？

海 手紙、届いてるでしょう。

次郎 手紙？ 手紙なんか知らないよ。

海 (源一に出したでしょう、あたしが書いたやつ。)

源一 おれ、知らないよ。

海 (雪を見て) あんた、だったかしら。

雪 知らない。あたし。

海 じゃ。(夢を見る)

夢 うん、あずかっている。

海 あずかっている。

夢 だって、コレって出されたから……あずかるだけだと思って。あつ！ 新しい虫！

海 新しい虫？

源一 どんな虫？

夢 ……チャンタテムシ。

次郎 チャンタテムシ？

源一 正体不明の虫だよ。別名アズキアライ。障子に止まってカサカサ、アズキみたいな音を立てるんだ。

三人、虫を追いつつぞろぞろ消えていく。

次郎 おい待て。

源一 いいから。

次郎 冗談じゃないよ。虫、虫っていったい。

源一 あのねえ、虫を馬鹿にしちゃいけないよ。地球上で一番繁栄している動物は、人間だと思ってるかもしれないが、こいつはとんでもない錯覚、実は陸上に限る限り、圧倒的に繁栄しているのは虫、昆虫なんだ。蟻なんて、ごく狭い地域だけで二十億、三十億はいる。だからね、宇宙人が見たら、地球を支配しているのは、昆虫だと思うはずだよ……。ある詩人もうたっている、こんなふうに……。

蟻は草葉の陰で、あるいは石の上で眠っている。世界は魔法をかけられたようにじっとしている。誰も動かない。君も動かない。世界もすべて金縛りにあっている。世界もすべて金縛りにあっている。

ブリッジ音楽……

次郎 世界は金縛りにあってるかどうかはわかりませんが、この浦田家の面々に出会って、ぼくの方が若干金縛りにあってしまった……。

暗転……

3

海鳴りの音……。

それにクロスして、本を読む声が聞えてくる。

ややあって、写場の長椅子で本を読む源一の姿が見えてくる。

源一………だいたい戦争というものは、われわれがあまりにも怠惰で、あまりにも安易で、あまりにもいい加減だからこそ起るのだ。われわれは心のどこかで、ひそやかに戦争を認め、許容しているからこそ、神の名において、戦争が堂々とまかり通ってしまうのだ。

次郎、現われる。

源一（気づかずに続ける）ある人物は語った。戦争の時だけ、人が人を殺すことが許される。なぜかといえば、自分の欲望や利益のために人を殺すのではなく、すべての人間の幸せのためだと思いついていたら、それは大きなまちがいである。もし死んでいく人間の顔を見たら、きみは必ず気づくはずだ。人間は苦しんで死ぬのだ。苦しみがあ
ら、いやいや死んでいくのだ……

源一、次郎に気づいて、やめる。

次郎 なに、それ。

源一 ヘルマン・ヘッセ。ドイツの詩人さ。

次郎 いまどき、やばいんじゃない、そういうの……憲兵に聞かれたら大変だよ。

源一 こんな田舎にいるの、憲兵。

次郎 いるよ、となりの町に連隊があるから……

源一、いつのまにかライトに身を寄せて、軀をあたためるような恰好をしている……

次郎 寒い。

源一 ああ、ひざが痛むんだ。

次郎 転んだの。

源一（いい淀むが）転んだみたいなものさ……やられたんだ、教練の時間、元少尉の先生に。木刀で横殴りにやられた。

次郎 どうして。

源一 いまのヘルマン・ヘッセ、ばかでかい声で読んでいたんだ。

次郎 やられるの、覚悟して読んでいたんだろう。

源一 なぜ、そんなふうに思う？

次郎 きみはそういうタイプだから。

源一 へえ、そういうタイプ？ はじめてだよ。

次郎 なが。

源一 おれって人間をびたりといい当ててくれた奴は… 煙草、吸う？

次郎 いや。

源一 吸ったこと、ないんだろう。

次郎 ある。

源一 いつ。

次郎 ……夏休みに一回(煙草をとる)。

源一 ムリすんな(煙草をとる)もどす) 中学四年か。

次郎 ああ。

源一 おれも四年だ。

源一、煙草を吸う。

次郎 学校の方はどうなってるんだ。

源一 学校の方はうまいこと、ひぎのあれで長期欠席。かなり名演技をやったからな、足を痛そうに引きずって

…妹たちも結核の疑いでこれも長期欠席。

次郎 結核？

源一 これも二セモノさ。おやじは寺の坊主たる。それも悪徳坊主だからその筋にワイロなんか使ってうまくやったんだ。もっともおやじの奴、三ヶ月前に爆弾にやられて死んじゃったけど…。

次郎 お姉さんはどうなの？ あの人は仕事をもってるの？

源一 いや、姉さんもぶらぶらしている……。それに、あれなんだよ、姉さんは実際に病気なんだ。

次郎 どこが悪い？

源一 (声を秘めて、頭を指さし) 風が吹く日にここがおかしくなる。

次郎 どんなふうにな？

源一 風が吹けば、そのうちわかるさ。

次郎 ……演技してるんじゃないのか。

源一 どうして。

次郎 いや、なに、きみんところって、みんな演技しているように見えるから。

源一 きみって、見かけよりアタマがいいな

次郎 じゃ、演技してるの、みんなで。

源一 そんなことわからないよ、それぞれ自由に生きてるし、別に相談したわけじゃないし……。ただ、なんとなくかな、暗黙の了解ってやつで、みんなぶらぶら生きていくことにしたんだ……。もちろん、ぼくがさ

りげなくリードしているけど……。

次郎 みんなでぶらぶらか……。戦争がたけなわで、進め、一億火の玉だつて時に、みんなぶらぶら……。けつ、

笑っちゃうよな。

源一 なんだい。

次郎 おれのおやじはニューギニア、おれの五つ上の兄貴はロシアの国境近くで戦ってるんだ。

源一 だから。

次郎 それなのに、みんなぶらぶら。

源一 そういうきみはなにをやってるんだ。

次郎 おれは、あれだよ、今日はあれだけど、学校は一応いってる。

源一 一応？

次郎 そりゃ、仕事のある日は時々休む。

源一 今日は仕事か。

次郎 ああ、客がくる。写真をとりにくる。おふくろが病気になってからは、おれが代りに撮ってるんだ。

源一 へえ、きみが？ でも、いまどき、写真をとりにくるなんて田舎は呑気だな。

次郎 呑気じゃないよ、明日、出征する人なんだ、どうやらすぐに太平洋の南半球の方へもっていかれるらしい。

源一 南半球か……。死ぬよ、その人、きつと。

次郎 (意表をつかれる) やめろよ、そんな。

源一 いや、南半球じゃだめだ。ラジオはごま化しているが、日本軍の敗色は濃い……。多分、生きて帰れな

い。よし、おれがきみの助手をやってやる。

次郎 いらぬよ、シロウトは引っこんでいてくれ。

源一 け、シロウトだって。

そこへ、次郎の姉の塩子、入ってくる。

塩子 ねえ、もう大丈夫？ もう階下に来てるんだけど。

次郎 もう？

源一 いえ、大丈夫です。

次郎 おいっ。

塩子 じゃ、呼んでくる。

次郎 あ、姉さんも入るのかい。

塩子 バカ、なにいつてんのよ、あたしはそういうあれじゃないんだから、アホウ。

塩子 去っていく。

次郎、準備をはじめる。

源一、勝手に手伝う……。

源一 お姉さんの知り合い？

次郎 同じ小学校へ勤めてる人。

源一 へえ、姉さん、学校の先生？

次郎 ああ。

源一 恋人かな、姉さんの。

次郎 知らねえよ。

源一 悪かったな、死ぬなんていつて。

次郎 ……。(ふり返る)

出征兵士の青年、矢坂、現われる。

続いて塩子……。

矢坂、軍服姿……。

矢坂 (敬礼)お願いします！

次郎 (あわてて)はあ。

準備を急ぐ。

次郎 あの、どういうポーズで。

矢坂 立ち姿でお願いします。

塩子 立ち姿？ 記念写真じゃないの。

矢坂 記念写真です。

塩子 じゃ、椅子にかけた方がいいんじゃない、うちの弟、まだまだ技術はあれだから。

矢坂 では、椅子に……でも、もう一枚、上半身の寄ったのを別にお願ひします。

次郎 上半身の寄ったの？

矢坂 ハイ、戦死した時のための……つまり、葬式用です。

次郎、源一、塩子、一瞬顔を見合せる。

源一 死にませんよ、あなたは。

次郎 ……(よくいうよといった表情)

塩子 そうよ、やめてよ、縁起でもない。

次郎 ぼくは寄りはとりませんから。

矢坂 わかりました。 じゃ、寄りはあきらめます。 お願いします。

次郎、矢坂のポーズをなおす。

矢坂 (姿勢をなおされながら) あれですね、一人で撮られるってのは、なんだか淋しいですね。

塩子 しょうがないでしょう、淋しいといったって。

矢坂 しょうがないですね。

源一 しょうがないよ、お姉さんも一緒に入ったら。

塩子 バカ、なにいったんのよ、関係ないあたしが入ってどうすんのよ。

源一 関係ないんですか。

塩子 関係ないわよ、なんにも。

源一 でも、知り合いなんでしよう、親しいんでしよう、一緒に入ったら。

塩子 そんな、だめ。

源一 この人は、このまま死ぬかも知れないんですよ。

次郎 バカヤロ！

矢坂 いえ、この人のいう通りです。戦死する確率が高いと覚悟しています。(塩子に)よかったら一緒にお願

します。(源一の方を見て)よかったらあなたも。

源一 おれも？

矢坂 お願いしますよ。

と、突然、音楽が聞えてくる。行進曲のようだ……。

一同、啞然。

ややあつて人影が現われる。

即興の衣装をした海、雪、夢の三人がポーズよろしく現われる。

あくまで生真面目に…… 「三人姉妹」のエンディングのセリフをいいはじめる。

雪 (マーシャのセリフ) まあ、あの音楽のひびき、あの人はたっていく…… わたしただけがここに残って、

またわたしたちの生活をつづけるのだから、おたがい、一生懸命がんばって生きていかなければ…… 生きぬ

いていかなければ……。

次郎 なんだよ、これ。

源一 チェーホフの三人姉妹だよ。こいつらの得意技なんだ。

次郎 得意技？

夢 (イリーナのセリフ) ああ、やがて時がくれば、どうしてこんなことがあるのか、なんのためにこんな苦しみ

があるのか、みんなわかるのよ……でも、まだ当分はこうして生きていかなければ……もうじき冬がきて、雪がつもるだろうけど、あたしたちは生きていかなければ……。

海、雪と夢を両脇にかかえて。

海（オリガのセリフ）音楽はあんなに楽しそうに鳴っている、あれを聞いていると、生きていきたいと思うわ……でも、やがて時がくれば、あたしたちはみんなこの世に別れて、永久に、忘れられてしまう……。わたしたちの顔も、声も、何人姉妹だったかということも、みんな忘れられてしまう……ああ、かわいい妹たち、それに行きずりの人たちよ、まだわたしたちの生活はおしまいじゃないわ……さ、さ、さ、みんなきて。

雪 そう、写真に入って。

源一 おいおい、やりすぎじゃないのか。

塩子 ねえ、困るわ、あたし。

矢坂 いえ、ぼくは困りません。こうなったら一人より大勢の方がいい……。

塩子、源一、抵抗しつつも、三人の姉妹にせきたてられ、軍服の矢坂をとり囲むように並ぶ。

海 さあ、撮って……。

源一 なんか、ポーズのきっかけが欲しいな。

雪（歌うように）この人は、明日たつていく。わたしたちだけがここに残る……

海 やがて時がくれば、どうしてこんな別れがあるのか、どうしてこんな苦しみがあるのか、いつかきつとわかる時がくる……

行進曲、高なる。
シヤッター音。
闇……

4

風音……

写場がぼんやり見えてくる。

次郎、登場。

次郎 いやはや、なんといいですか、ぼくは日に日に疲れていきました。とにかく何をやり出すかわからない連中
中でして……あ、また、誰かきます、こんな夜中だというのに。

雪、くる。

雪 姉さん、こなかった？

次郎 いや、どうしたの、こんな夜中。

雪 ウン、馬が逃げたのよ。

次郎 馬？

雪 姉さんが飼っていた馬。

次郎 姉さんが飼っていた馬？ 姉さん、どこで馬を飼っていたんだ？

雪 いいじゃない、どこで飼っていたって。

次郎 よかないよ。

雪 うるさいわね、姉さんのあれよ、頭んなかで飼っていた馬……幻の馬。

次郎 幻の馬。

雪 汗血馬って知ってる？

次郎 汗血馬？ いや。

雪 むかし、モンゴルあたりの平原にいた馬。沢山の毛細血管が皮膚のすぐそばにあるから、走ると赤い血を流しながら疾走しているみたいに見えるらしいの。

次郎 その馬が？

雪 そう、その馬が。

次郎 見てみたいな。で、どこへ逃げたの。

雪 どこへたつて、ばかね、初めっからいない馬なんだから。

次郎 そうか。

雪 とにかく風の吹く晩によく逃げるのよ。

次郎 そういえば、風が……。

雪 あ、姉さんの声がする。姉さんがきたら、うまく調子合せて

次郎 でもさ。

雪 なによ。

次郎 そいつは幻想だって、はっきりいってやったら。

雪 あのね、それが通じるようなら、とうにやっってるわよ。

海、現われる。

写場に視線を走らせる。

次郎 なにか。

海 ううん、ちよつと捜しもの。

雪 汗血馬でしょう、姉さん。

海 そう、でもいくらなんでも二階へ上つてこないわねえ。ただ、あれなの、ちよつと声がしたみたいなのがしたもので……じゃ。

雪 あ、姉さん、一緒に捜そうか。

海 いいの、あいつ、逃げたのよ、きつと。もともとあたしのこと嫌っていたから……いやな予感はしてたんだ。だって昨日、あたしの顔を見て、笑ったから。

雪 誰が？ 馬が？

海 そうよ、あいつ。

次郎 馬って、笑うの。

雪 いいから。

海 よくいうじゃない、馬って笑うとよくないって。

源一、夢、少し遅れて塩子、顔を出す。

源一 どうした、こんな夜中。

雪 (目くばせしながら) 姉さんのホラ、馬が逃げたのよ。

源一 えつ、こんな夜中に？ この前みたいに昼間逃げてくれると助かるんだけど。

夢 あたし、さつき、海の方で馬のいななきをきいた。

源一 (小声で) やめろよ、のりすぎだよ。

夢 だっけきいたんだもん(塩子をつねって) ねえ。

塩子 ン？ ああ、きいた。

次郎 姉さん！

塩子 なによ。

次郎 (小声で)馬なんているわけないだろ、この辺に。

塩子 いるでしょう、一頭ぐらい。

次郎 いても、海の方で馬の声がするわけないだろう。

塩子 だったらあれよ、東南アジアのマラナの馬よ、あれは時々神社の倉庫を脱け出して、海辺を走ってるって

噂があるじゃない。

次郎 バカ。あれはでたらめ。みんなが面白がって作った話。だいいち張子の馬が動くわけないだろう。

源一 なんだい、マラナの馬って。

次郎 戦争がはじまる前、東南アジアの学生たちが農業の研究で、この辺に暮してたんだ。その連中が残してい

ったお祭り用の馬。

夢 とにかくいこうよ、海の方へ。

雪 姉さんもいくんでしょう。

海 (首をふる)

夢 どうして。

海 もういいのよ、あいつ、多分生れ故郷のモンゴルの平原を目ざして一目散に逃げていったのよ。戦争が終つ

たら、あたしの方から会いにいつてやる……。

雪 どうする？

夢 ン……

塩子 いこうよ。いきましよう。こんな風の夜の海は凄いわよ。もしかしたら、高い波音にまじって馬のいな

なきが聞えてくるかも……

次郎 よくいうよ、小学校の先生が。

夢 (塩子の腕をとって)あたし、いく。

雪 あたしも……。

次郎 おいおい。

次郎の声に構わず、塩子、夢、雪が出ていく。

次郎 まいったな。うちの姉さんまでおかしくなっちゃって。

海 えっ？

次郎 いや。

風音、高なる…そして波音…

源一、海のそばへいく。

次郎、二人を見守る。

源一 (この男にしてはひどく優しく) どう、近頃また眠れないの？

海 うん、ゆうべはまるで眠れなかった…(ふと立ち上る。まじまじとあたりを見廻す) ねえ、どうしてあたし、ここにいろの。

次郎 (驚く) どうしてたって。

海 (源一) になにかあったの。

源一 いや、別に。

海 (見つめて) はっきりいって。また、あれ?もしかしてまた馬?

源一 ああ。

海 …みんなに迷惑かけるわね。

源一 気にしない方がいい。

海 ……そうねえ、あんたがしっかりしているから。

源一 ……

海 ねえ、聞えてる？

源一 聞えてるよ。

海 なんだか元気がないわねえ。

源一 ……

海 あたしみたいな厄介者が、一日一日なんとか暮せるのは、あんたのお蔭よ。

源一 それは皮肉かい。

海 なにいつてんのよ、違うわよ、本心からいつてる。長男のあんたが、きょうだいの面倒をさり気なく、ちゃんと見てくれるから、あたしたち安心して毎日が暮せるのよ。

源一 ……うそだ。

海 うそじゃないわ。

源一 うそだ！でたらめをいうな！

海 源一……。

源一、床にうずくまる。

源一 (不意に泣きじゃくる) おれは最低だ。くずだ。生きていてもしょうがない人間だ。爆弾にやられて死んだ方がましだ。

海 やめなさい、源一、さ、立って、立ちなさい！

源一 いやだ、立ちたくない。おれは卑怯者だ。もう二年もしたら戦争へいかなくちゃいけない、おれはこわい、銃なんて持ちたくない、人なんて殺したくない。だから、だから卑怯者は卑怯者らしく生きるんだ。

海 卑怯者らしく生きるって、どう生きるのよ。

源一 なにもしない。なにも見ない。なにも聞かない。ただ川の底の石のようにじっとしている。そうすれば、やがては石のようにはなく、おれは石そのものになる。石になれば、もう大丈夫。おれの魂は百年も千年も大昔へ駆けもどっていく。そこでおれはいろいろなものに生れ変わる。木々の青々とした葉っぱになったり、時には森のけものになったりもする。川の魚になったり、大空の雲になったりもする。どうだ、悪くないだろう。なんだ、その眼は。文句あるのか、え、文句あるのか！姉さん！くそっ！

源一、海にとびかかる。

あわてて次郎、割って入り、つい源一を投げとばしてしまう。

源一、昏倒……。

次郎 おい！おいったら！

次郎と海、駆けよる。

海、源一を抱きしめる。

海 大丈夫・・・このあと、少したてば意識をとり戻すから。

次郎 初めてじゃないの、こんなこと。

海 東京じゃたびたび…こっちは空気がいいのか、今夜までは一度も……。

次郎 (茫然)……

海 なによ、その眼。アタマのへんなやつばかりだと思ってるんでしょ。

次郎 ……。(うなづく)

海 (小さく笑って)あたしは二セモノ。

次郎 二セモノ？えっ？じゃ、あれ。

海 幻の馬？ あれはみんな演技よ、お芝居よ。

次郎 説明してよ、アタマがこんがらがってきた。

海 この人はね、本当は気がやさしいの。むしろ気が弱いくらい……でも、この人は長男だし、父は死んじゃってるし、自分じゃ一家の柱にならなくちゃいけないって、そりゃ内心じゃガチガチに緊張してるのよ。だから、あれよ、この人を鍛えるためにあたし。

次郎 気がへんになったマネをしているわけ？

海 そう、そういうこと。

次郎 よくわからないな、まだ。

海 つまりさ、彼を鍛えるためには、家族の中に弱い人間がいた方がいいでしょう。彼が庇護してやらなきゃいけない人間とか……。そりゃ見ての通り、妹たちもそんなにまともじゃないけど、もつと変な人間がいた方が、彼が一家の柱としてつよく、大きく成長していく……そう思って、あたし……。

次郎 …… (唾然)

海 あたしの考え方、へん？

次郎 そりゃ、多少へんだよ。

海 やっぱりへんか。

海、源一の顔をハンカチで拭いてやる。

次郎 へんだよ、あんたも、あんたの家族も。

海 みんなへんか。

次郎 ああ、みんなへんだよ……。でも、うらやましいよ。

海 うらやましい？

次郎 うちの家族はそんなふうにあし合っていない……平凡だからな、うちの家族は。

海 平凡な家族は、平凡な家族なりに、愛し合ってると思うよ……そう見えるもん、あんたの家族……

と、風の中に馬のいななき……

海 馬よ……馬のいななき……

次郎 やめてよ、彼はまだ眠ってる、もう芝居はいいよ。

海 いいえ、芝居じゃない、本当に聞える

次郎 えっ？

風の中に、馬のいななきに混って笑い声が聞える。

音楽、忍び込んでくる。

やがて、青い馬が数頭、現われる。

首と胴体だけの張子の馬、マラナの馬をつけた雪、夢、塩子たちだ……

彼女等は、少女に戻ったように、そして水の中のように、ゆつくりと源一を抱く海と次郎のまわりを廻り始める……。

青い海……

青い馬……

そして馬のいななきと少女の笑い声が反響する……

やがて、それを打ち消すように風音がつよくなり……みんなの姿が闇の底にかき消されていく……

半鐘が鳴る……

次郎、登場。

次郎 火事ではありません。わが町では、緊急の事態が発生すると、半鐘を鳴らして町民に知らせるんです。この日の事件は、毒ガスです。わが町には古くからカーバイトの工場がありました。実はそこから大量の毒ガスが流れ出したんです。カーバイトが毒ガスを発生したのではない。カーバイト工場が軍の命令で秘かに毒ガスを作っていたんです。毒ガスの名前はホスゲン……もしかしたら皆さんの記憶にあるかも知れません。あの地下鉄サリン事件が発生した時、はじめはそうではないかと疑われたのが、このホスゲンという毒ガスです……

半鐘の音が遠のき、海鳴りの音がかぶさってくる…………。塩子と夢、衣服を乱し、もつれ合うようにして入ってくる。

次郎 姉さん、なに？ どうしたの？

二人、長椅子に倒れ込む。

次郎 おい、ねえ、なにがあったんだ。

次郎、二人の躰をかかえ起す。

塩子 町の連中にやられた。

次郎 町の連中？ 誰？

塩子 わからない、闇から五、六人とび出してきて、いきなり木刀で殴りかかってきた。

次郎 でも、なんでまた？

夢 マラナの馬。

次郎 マラナの馬がどうした？

夢 よくも、町の神聖な宝物、マラナの馬を勝手にもち出しやがったって叫んでいた。

次郎 そうか、町の青年団の連中、マラナの馬を大事にしていたからな。

塩子 だけど、それだけじゃないみたい。

夢 兄さんが、昨日役場の前で、例の詩を大声で朗読したみたい。

次郎 例の詩？

夢 われわれ人間が平気で死ねるのだとお前たちが思っていたら、それは大きなまちがいである。

次郎 もし死んで行く人間の顔を見たら、お前たちは必ず気づくはずだ。人間は苦しんで死ぬのだ。苦しみが

ら、いやいや死んでいくのだ……

塩子 それ……連中、口々にどなっていた、あんなくだらん演説なんてしやがって、お前たちは前々から

目障りだった。とにかくお前らは非国民だ、とつとつこの町から出てけ。

夢 お前らがいると、この町が腐る、この平和な町が腐ってしまう……

次郎 なにが平和な町だ！ 毒ガスなんか作りやがって。おれたちはつい二、三日前まではカーバイトでレンガ

を作ってるんだとばかり思っていた。それが町が腐るだと！ バカヤロ！ もうこの町の連中は、毒ガス

中毒で、アタマがみんなおかしくなってるやがるんだ！

塩子 次郎………

そこへ、海、入ってくる。

海　いま、となりのおばさんから聞いた。(ふと)雪は？

塩子と夢、顔を見合わせる。

塩子　そういえば、雪さんとは途中ではぐれた。

次郎　大丈夫かな。

夢　(不安をふり払うように)大丈夫よ、きつと。雪姉さん、いざつて時には、犬みたいに噛みつくから。

と闇の奥から声。

「いや、大丈夫じゃない。」

源一、現われる。

源一　この町は大丈夫じゃない。みんな、いかれている。近いうちに出ていこう。

海　出ていこうって、どこへいくのよ。東京へ戻るの？

源一　いや、東京へは戻らない。

夢　じゃ、どこへ。

源一　おやじの遠い親戚が長崎にいる。

海　長崎？長崎って軍艦なんか造つてるところでしょう、空襲にやられるよ。

源一　でも、ここよりましだ。あそこは都会だ。

夢　雪姉さんが、前から長崎へいきたがっていた。ビードロ、おらんだ坂、浦上の天主堂……

次郎 おいおい、ちよつと待てよ。そりゃ今夜みたいなことがあるとあれだろうけど、町の人間、全部が全部変なんじゃない。

源一 さつきいったことと違うじゃないか。

次郎 さつきいったこと？

源一 おれはそこでちゃんと聞いていた。もうこの町の連中は毒ガス中毒で、アタマがみんなおかしくなっている……

次郎 あれは、つい。

源一 口がすべったつていうのか。田舎の人間ってみんなそうだ。口ではもってもらしいことをいうけど、腹んなかは違う。自分の町をやみくもに愛してる、まるごと愛してる。

次郎 そういうきみはどうなんだ。生れた土地の東京を愛してないのか。

源一 愛してない。姉さんたちは知らないけど、おれは愛してない！（頭をふり）おれはね、だいぶ前から愛することよりも疑うことを覚えてしまったんだ……。だから東京も疑っている、戦争も疑っている。平和も疑っている、いや、ありとあらゆることを疑っている……おれは、荷作りをする。

源一、出ていく。

夢 兄さん。

海 ねえ。

二人、追っていく。

塩子 あれよ、きつと。腹立ちまぎれにいつてるだけよ。だって、あの人たち、この町がきれいじゃなかったもの。

塩子も追って、姿を消す。

次郎、一人……………。

海鳴り……………。

ややあつて、物音……………。

次郎、闇をすかして見る。

次郎 誰？誰がいるの？

雪、現われる。

衣服が泥だらけで、裸足である……

次郎、かけ寄って、椅子にかけさせる。

雪 ……水が欲しい。

次郎 ……(とりにいこうとする)

雪 待って。ひとりにしないで。

次郎、雪のそばに戻る。

雪 寒い……………抱いてしっかり抱いて。

次郎、おずおずと、しかししっかり抱きしめる。

雪 あったかい……

次郎 あのさ。

雪 (さえ切るように)あたしは、大丈夫。

次郎 ……

雪 ホントに大丈夫よ、ただつよい風が一瞬あたしの躰のなかを吹き抜けていっただけ。

次郎 ……この町がきらいになったかい。

雪 どうしてそんなこときくの？

次郎 源一くんは、この町を出ていくといっている。長崎へいくつて。

雪 長崎？

次郎 きみは長崎が好きなんだつて。

雪 でも、まだ一度もいったこと、ないの。

次郎 ビードロ、おらんだ坂、浦上の天主堂。

雪 それも悪くないけど、もっとすばらしいものがあそこにあると思う。どんなものかわからないけど、未知なるもの……あたし、出来れば詩人か小説家になりたいの……あたし、多分結婚はしない、ずっと独りで自由でいたい。

次郎 結婚したつて、それなりの自由があると思うよ。

雪 だめよ、バイロンがいつてる。すべての悲劇は死をもって終り、すべての喜劇は結婚をもって終る。とにかく、あたし、いい作品を書く。そして、ホラ、同じバイロンがこういつている。ある朝、ぼくが目覚めると、ぼくは有名になっていた、世間の注目の的になっていた……もう、離して。

次郎 え？

雪 これ以上、こうしていると、あなたを好きになりそう……妹の夢、あの子、あなたに関心をもっている。

次郎 関心？

雪 (軀を離して)あたしは独りで生きていけるタイプだけど、あの子は独りはだめ……あの子ったら、とてもナイーブなんだけど、並はずれてトンチンカンなの。

次郎 トンチンカン？

雪 だから、あの子がトンチンカンなことをいっても、ちゃんとうけとめてやって欲しいの。

次郎 あのね。

雪 もういく。あたし、顔や手足を洗って、すべてを洗い流してやる……(行きかけて、ふりむく)あたし、長崎も好きだけど、この町も愛していた。

次郎 この町も愛していた……

雪、姿を消す。

次郎 そう、彼女はすでに過去形でいってしまいました。この町も愛していた……それをきいて、ぼくの胸はポツカリと穴があいたような気持ちになりました……

音楽……

6

音楽、つづく。

ライト、チェンジして……

次郎 そして、ついにあの日の朝がやってきました。彼等の出発の日です。長崎の親類の家から、“いま、こら

それでも困るけど、どうしてもというなら仕方がない”という返事をもらい、源一君が決断したものです。そうそう、いま思い出しましたが、あの日、ほくは明け方妙な夢を見ました。いつか写真をとりにきた出征兵士が夢の中に現われました……

ライト、更にチェンジして、蒼白いものに変る……
軍服姿の矢坂、現われる。

次郎 (ふり向いて) どうしたんです。

矢坂 (敬礼して) すみませんが、やっぱり寄りの写真をとってください。

次郎 寄りの写真？

矢坂 そうです。寄りの写真。

次郎 (ハツとして) もしかして、あなたは。

矢坂 (笑って) 大丈夫、まだ死にませんよ。でも、念のためにとっておきたいんです。さ、お願いします。

次郎 じゃ。

次郎、カメラの用意をする。

矢坂 あの。

次郎 え？

矢坂 いつかの、あの人たちはどうされました？

次郎 いつかの？ ああ、あの連中、いますよ、でも、もうじき出発するんです。ここを離れるんです。

矢坂 そうですか、じゃ、ここも淋しくなりますね。

次郎 ええ、まあ。

矢坂 あの。

次郎 なんですか。

矢坂 あまり時間がないんです、急いでください。

次郎 じゃ。

次郎、ピントを合わせる。

矢坂、直立不動の姿勢。

矢坂 やっぱりあれですね、独りっつのはさみしいですね。

次郎 呼びますか、みんなを。

矢坂 いや、いいです。人間、死ぬ時はみんな独りですから。

マグネシウムの閃光。

闇。

ゆっくり闇が薄れていくと、矢坂の姿が消えている。そして次郎の姿も。ややあつて、次郎が眼をこすりながら入ってくる。

いつのまにか、長椅子にバッグを手にした夢が眼をつむっている。

次郎 なにしてんの。

夢 (眼をあける)……

次郎 ねえ、なにしてんの。

夢 においをかいでいる。

次郎 なんのにおい？

夢 この写真館のにおい。

次郎 どんなにおいがする？

夢 なにかが焦げたようなにおい。

次郎 それはマグネシウムだ。

夢 それにけものにおい。

次郎 けものにおい？ おれしかないよ。

夢 じゃ、そのおれのおい。

次郎 け、おれがけものにおいか。

夢 このあいだの晩、雪姉さんと抱き合っていた。

次郎 のぞいてたのか。

夢 あたしのこと、トンチンカンとってた。けど、雪姉さんの方がずっとトンチンカンなの。雪姉さんの詩って知ってる？

次郎 いや。

夢 固苦しくて演説みたいなんだから。ああ、昨日はすでに歴史だ、それはもうあまりに遠い。

次郎 ああ、昨日はすでに歴史だ、それはあまりに遠い。

塩子、現れるが、遠慮したようにすっと隠れる。

夢 あの人の詩はね、たいてい有名詩人の詩集から盗んだものなの。それを自分流に改造する、そうだ、これならかましましな方……もし私たちに翼があったら。

次郎 もし私たちに翼があったら。

夢 思い出から逃れようと、多くの人々は飛び立っていくだろう、北へ急ぐ鳥のように、昨日は遠い、昨日ははるか……でも、いまを生きることすら、ふと私たちは思う、いまは幻……いまは幻……覚えた？

次郎 いや、すぐにはムリだよ。

二人、どちらともなく声を合わせて。

二人 もし私たちに翼があったら、思い出から逃れようと……

その時、物音。

次郎 誰？

塩子、現れる。

塩子 あ、夢さん、ここだったの。セーター一つ忘れてるって、雪さん叫んだ。

夢 セーター？ そうだ、青いセーター、どこ？

塩子 雪さんにきいてみたら。

夢小走りに去る。

次郎 なんだか、あわただしいな。

塩子 うん、さみしくなるわねえ。

次郎 勝手だよ、あいつら。勝手にやってきて、勝手に去っていくんだから。

塩子 (たしなめるように)次郎……

次郎 わかってるよ、でも。

塩子 でも、なによ。

次郎 ……別れの記念撮影ぐらいしたいな。

塩子 あたしも実はそうだったのよ、そしたら源一さんが。

次郎 あいつ、またなんかいったのか。

塩子 別れの写真なんて縁起が悪いって。

海、くるが、足を止めてしまおう。

次郎 バカヤロ、なんで別れの写真が縁起が悪いんだよう。

塩子 知らないよ、ただそういうだけなんだから。

海 あのね。(進み出る)

塩子 海さん。

海 違うのよ、あいつ、今朝の電話、つい聞いちゃったのよ。

次郎 今朝の電話？なんだい、そりゃ。

海 知らないの？次郎くん。

塩子 まだ、次郎にはいってないの、(次郎の方へむいて) ホラ、冬のはじめに写真とりにきた矢坂さん、南方へ出征していった……………今朝、町役場の友達が知らせてくれたの名誉の戦死をとげたという公報が入ったって。

次郎 (ハッとして) 姉さん、おれ。

塩子 どうしたの。

次郎 いや……………

短い沈黙。

海 あのさ、あたしとお姉さんの写真、一枚とってこない？

塩子 海さん。

海 いや？

塩子 ううん、いやじゃないけど……(と、次郎を見る)

と、源一、現われる。

海 (挑戦するように)あたしたち、記念に写真をとってもらおうのよ。源一、あなた、余計なこと、いわないで。

源一 あのさ。

海 やめて！ 余計なこと、いわないでといったでしょう。

源一、一瞬思案するが、海の横に並んで立つ。

海 なによ。

源一 おれも入るよ。

海 なにいったんのよ、あんた、さつき。

源一 さつきはさつき、いまはいまだよ。ここへ入ってきて、ふうつと気が変わったんだ……さ、撮ってくれよ。

次郎、突然、カメラから離れて長椅子にどーんと腰をおろす。

海 次郎くん。

次郎 (頭をふる)やめとくよ。

海 どうして。

次郎 おれだって、ふうつと気が変わったんだ。いやだ、冗談じゃない、写真なんてくそ食らえだ！
塩子 次郎・・・(近づく)

しかし、次郎、塩子の手をつよく払いのける。
遠くから汽車の汽笛……

海 あれは？

塩子 (時計を見て)もう一本前の汽車だと思う……でも、三十分後には。

海 そう、じゃ、急がないと。

源一、海に先にいくよう目くばせ。

海と塩子、去っていく。

源一と次郎……

源一、煙草を出して、火をつける。

それを次郎に無言ですすめる。

そして、二人は一本の煙草を交互に吸う。

源一 また今度、会った時……

次郎 また今度、会った時？

源一 写真をとってくれよ。

次郎 ……

源一 おい、約束だよ。

次郎 ……

源一 おれが縁起が悪いなんていったせいで、あれなんだろう。

次郎 ……

源一 おい。

次郎 わかったよ……この次、会った時、写真をとる勇気が多分……

汽車の音、近づき……、轟音をたてて通りすぎていく……
闇……

7

音楽、忍び入ってくる。

次郎、現われる。

次郎 あの時、なぜ写真を撮らなかったのか、なぜ写真を撮る勇気がなかったのかくやまれます。

写真館の写場ぜんたいが奇怪な影に覆われていく。

次郎 彼等が去って一ヶ月ほどしたあの日、そう、あの日がやってきました。一九四五年八月九日、広島につづいて長崎にも原爆が投下されました……………

いつのまにか、写場ぜんたいがスクリーンのようになっている

次郎 その日の長崎の上空は、東シナ海から移動してきた前線のために、空は厚い雲に覆われていました。しかし、午前十一時近くなると次第に雲が薄くなり、その一瞬の雲の切れ目から原子爆弾が投下され、市(まち)の中心からやや離れた浦上川の上空百三メートルのところで爆発しました。その時間、午前十二時二分……………

音もなく閃光……………

奇怪な原子雲……………

ややあつて、シルエツト気味の人影が見えてくる。

人影一 ピカッ！信じがたい光の雪崩が数秒つづいたように思えました。一瞬、八月の明るい太陽はその光に吸収され、あたりはなにも見えなくなりました。そしてすぐに、強烈な衝撃が体や頭や、それこそ指の先まで襲ってきました。

人影がクロスして、

人影二 わたしはその瞬間、少し違った衝撃をうけました。なんていったらいいのか、そう、濃いペンキを全身にべったりかけられたように感じました。空が抜け落ちてきたと思ったのです。そして、あとからわかったのですが、顔から肩、お腹まで火傷を負いました。

更に、人影がクロスして、

人形三 あたしは、やや時間がたつてからの印象が、つよく残っています。見渡す限り家と木が倒れ、廃虚から火が吹き出していました。道を歩いていて、馬をひいている人の死骸を見たのですが、その人は生きているようにつつ立っており、髪の毛が針金のように逆立っていました。浦上川は死んだ人や瀕死の人でいっぱいでした。火傷をした子どもたちは、お母さん、お母さんと叫んでおり、一方母親たちは声にならない声で、子どもの名前を呼んで探しまわっていました。

更に人影がクロスして、

人影四 あたしが一番印象に残ったのは、雨の中にボンヤリ立っていた十八、九の若い女性です。彼女が身につけているものは、半分になった下ばきだけで、なんとというか裸同然でした。彼女は私の方に向かって二、三步、歩きかけましたが、自分の姿が恥しくなったのか地面にうずくまり、私に助けを求めました。彼女のその手を見ると、皮膚は焼け落ち、まるで手袋をはめているようでした。

そして、その人影に次郎がまじる。

次郎 実は彼等の音信が途絶えてから、そして彼等の死を確信してから、ぼくは原爆についての資料を何年もかかって、読みあさりました。もちろんいろいろな事実や知識をえましたが、この胸にポツカリとあいた空

洞を埋めることはできませんでした……それは、いまも同じです。そして、幾度も思い返すのは、あの別れの朝のことです。なぜあの時、一枚の写真を撮っておかなかったのか……

ライトがゆっくり変わり……いつもの写真館の写場に戻る。

塩子、現われる。

塩子 ねえ、西田不動産からまた電話があった。来月早々にも、ともかくここをこわして工事に入りたいって。次郎 うん。

塩子 もう契約しちゃったんだから、早く踏んぎりをつけないと……この長椅子、どうする？

塩子、長椅子をいとおしそうに触れる。

次郎 (ふと客席に向って) 断っておきますが、姉さんもぼくと同じで、ここへ入ると若返ってしまふんです。

塩子 (ふり返って) そうだ、この間さ、久しぶりにビートルズ聞いたら、へんなこと発見しちゃった。

次郎 ビートルズ？

塩子 そう、ホラ、イエスタデイ……あれを聞いていたら、例の浦田家の雪さんのこと、とつぜん思い出して……

次郎 ああ、あの女流詩人？

塩子 あの人、いろいろ詩をつくってたでしょう、昨日はすでに歴史だ、なんてやつ……ところがビートルズ聞いていたら、なんとなく歌詞の内容が似ているのよ。

次郎 へえ、どんなふうによ？

塩子 ビートルズは英語だからあれだけど、訳してみると似てるんだから……昨日までは恋はやさしくそして今は生きていることがつらい……ああ、これは幻、これは幻……

次郎 そういえば、似ているな……あれは、たしか。

塩子 もしわたしたちに翼があったら、

次郎 へえ、どうして知ってるの。

塩子 いいから、もしわたしたちに翼があったら。

次郎 思い出から逃れようと、多くの人々は飛び立っていくだろう、北へ急ぐ鳥のように……昨日は遠い、昨日ははるか、でも、いまを生きることすら、ふと私たちは思う、いまは幻……いまは幻……

写場のあかりがゆっくり変化していく。

次郎 姉さん、なにか感じない。

塩子 ……感じる。

次郎 でも、気のせいだよ……ねえ。

塩子 なに？

次郎 記念写真を一枚撮らないか。どうせここはなくなるんだし。

塩子 あたし一人で？

次郎 いや、おれも入る。二人の記念写真さ。

塩子 セルフタイマー？

次郎 そう。

塩子 いやねえ、子どもに帰ったみたい。

次郎 いいだろう、思いたった時にどうしても撮る。それがいいんだ。

塩子 次郎、あなた、まだくやんでいるのね、あの時、写真を撮らなかつたこと……

次郎 さ、さ、早く……

二人で、カメラをととのえ、タイマーをセッティングして……。
塩子、ひとり早くポーズをとって。

塩子 早くう。

次郎 いそがなくていい、タイマーをいっぱいにしたから。

二人並んでかける。

じっとカメラを見つめる。

音楽、忍び入ってくる。

と、闇の彼方から、あのなつかしい面々が現われる。

源一、海、雪、夢の四人だ……

と、もう一人、黒い影が……出征兵士の矢坂である。

全員、カメラに向う。

永遠を凝視するようなそれぞれのまなざし……

シャッターの音……

全員がゆっくりモノクロの写真のなかにおさまっていく……

(終)